

就労者の服装に対する他者の意識に関する研究

Attitudes of others toward dress in the working scenes.

高橋 美登梨 大枝 近子

(Midori TAKAHASHI Chikako OOEDA)

Abstract :

The purpose of this study is to clarify the attitudes of others toward dress in the working scenes. An online questionnaire survey was conducted for men and women over the age of 18 ($n=249$). The question items are "Comparison of dress and other appearance factors" and "Attitudes of others toward dress in the working scenes." The main results were as follows: 1) Dress and hairstyles are more impressive than other appearance factors. 2) As a result of factor analysis of the answers to "Attitudes of others toward dress in the working scenes" (Promax rotation / maximum likelihood method), 4 factors were extracted. The factor name was "Formal attire," "Wearing a suit for formal occasions," "Impression management by dress," "Clothing functionality." The average value of the subscale scores was "Clothing functionality," "Impression management by dress," "Wearing a suit for formal occasions," and "Formal attire" in descending order.

キーワード : 就労場面、服装、他者の意識、インターネットアンケート調査

Keywords : working scenes, dress, attitudes of others, the online questionnaire survey

1. 緒言

被服にはノンバーバルコミュニケーションとしての役割があり、被服に関する行動の社会的・心理的機能の一つとして、情報伝達が挙げられている。被服による情報伝達とは、被服自体が持つ象徴的な意味とともに、着用される状況と合わさり、多様な情報を提示する手段になることを示す。

この被服による情報伝達は、就労場面での着用者の印象形成や印象管理に大きな影響を与えることが明らかになっている。1980年代には中川⁴⁾、中川ら⁵⁾はサラリーマンにとってスーツ(背広)は信用を得るための手段になっていたことを報告している。1990年代には、矢尻ら¹²⁾

は男性の通勤スタイルについて調査した中で、スーツスタイルが根強く定着しているものの、若年層ではソフトスーツスタイルの浸透も見られることを明らかにしており、男性の通勤スタイルが変化していることが分かる。2000年以降は、大石⁷⁾は日本の有職女性における仕事時の服装による印象管理傾向とキャリア志向の関連があるとし、中川ら⁶⁾は印象管理要求が職場における着装規範意識を高めることを報告している。このように就労場面において支持される服装は時代とともに変化し、印象形成や印象管理には服装規範が関係しているといえる。

服装規範は服装に関する社会規範(social norm)であり、時代背景や文化等の影響を受け

て変容する。生活の場面や着用者によって服装規範は異なるため、先行研究では福岡ら²⁾、牛田ら⁹⁾、阿部ら¹⁾、牛田ら¹⁰⁾、辻ら⁸⁾、牛田ら¹¹⁾、によって着基準（生活の各場面での服装の基準）を探ることや被服行動と自意識、独自性欲求、自尊心等の個人差要因との関連について検討されてきた。個人差要因については自意識の高さが着基準や着意識に影響することが明らかにされている。内藤³⁾は、着基準のうち、「社会的調和と規範」、「自己アピールと流行」には着用場面や衣服の選択・決定基準の重視が影響することを報告している。いずれの研究も着用者の意識構造を検証しており、他者を評価する視点から服装規範を捉えることは行われていない。被服行動を行う当事者ではなく、他者の意識に焦点を当てることによって、新たな視点から着の在り方を検討することが期待できる。

そこで、本研究では、通勤を含む就労場面に着目し、就労者の服装に対して当事者以外の他者がどのような意識を持っているかを明らかにすることを目的とした。就労者の服装は、オフィスに勤務する時の服装とした。調査は、18歳以上の男女を対象とし、幅広い世代からの回答を得るためにインターネット・アンケート調査を実施した。

2. 研究方法

(1) 調査の実施方法

調査はインターネット・アンケート調査によって2020年12月～2021年7月に行った。調査のフォーマットはQeustantを利用した。調査対象者は18歳以降の男女とし、アンケート調査のURLを大学の講義や知人等を通じて配布した。調査の冒頭に調査への協力は任意であることを明記し、調査協力に同意した者のみ回答できるようにした。

(2) 調査内容

調査項目は主に「服装が印象に残る程度」と「就労者の服装に対する他者の意識」によって構成した。

1) 服装が印象に残る程度

一般的に、衣服（胴や四肢等の身体の大部分を覆うもの）のほかに装飾品を含めたものを被

服といい、衣服が人間に装着された状態を服装という。ここでは、服装が他の外見の要素に比べて印象に残る程度を検証する。服装以外の外見の要素は「化粧」、「髪型」、「アクセサリ・時計」、「靴」、「持ち物（バッグ等）」とした。「服装（着こなしを含む）」を含めた6項目について、「直接、人と会う場面を想像してください。次の事柄に関して印象に残る程度を当てはまるものから選択してください。」の問いに対して、「とても印象に残る」、「やや印象に残る」、「ほとんど印象に残らない」、「全く印象に残らない」の4段階より回答を得た。なお、質問項目の順番はランダムにした。

2) 就労者の服装に対する他者の意識

本研究では被服行動を行う当事者ではなく、就労者の服装に対して当事者以外の他者がどのような意識を持っているかを明らかにすることを目的とした。「働く人（主にサラリーマンやOL）の服装に対するあなたのお考えをお聞きます。通勤や勤務中の服装について、あなたの考えに当てはまるものを選択肢より選んでください。」の問いに対して、32の質問項目について「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階より回答を得た。

質問項目は、フォーマル性の高い装い、カジュアルな装い、被服の機能性、服装の与える印象の4つの観点より設定した。フォーマル性の高い装いは「オフィス勤務の男性の服装はスーツがよいと思う」、「オフィス勤務の男性の服装としてスーツ以外のジャケットでもよいと思う」、「商談等の接客時の男性の服装はスーツがよいと思う」、「オフィス勤務の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う」、「商談等の接客時の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う」、「男性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う」、「女性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う」、「ジャケットの着用によって、信頼感が増すと思う」、「男性のネクタイの着用によって、信頼感が増すと思う」の9項目、カジュアルな装いは、「オフィス勤務の男性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思う」、「オフィス勤務の女性の服装としてカジュアルな服装（ニット、カットソー、カーディガ

ン等)でもよいと思う」,「流行を取り入れた服装をすることは重要だと思う」,「爪の手入れ(マニキュア等)も重要な身だしなみだと思う」,「男性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない」,「女性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない」,「頭髪も重要な身だしなみだと思う」の7項目,被服の機能性は「暑い時期には、涼しく過ごす(ネクタイをしない、シャツのボタンをあける、腕まくりをする)ことを優先してよいと思う」,「暑い時期には、靴下やストッキングは履かず、サンダル類で勤務してもよいと思う」,「服装は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思う」,「靴は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思う」,「寒い時期における室内での防寒は、ひざ掛けをしたりショールを羽織ったりして調整してもよいと思う」,「鞆はトートバッグ型でもリュック型でも使いやすいものでよいと思う」の6項目,服装の与える印象は「職種による服装のイメージはメディア(テレビや雑誌等)の影響を受けている」,「職種による服装のイメージは自分の社会経験によって形成される」,「服装によって職種をイメージできる」,「服装の着こなしによって仕事ぶりを想像する」,「服装の着こなしによって性格を想像する」,「ラグジュアリーブランドであることが分かる服を着ている人に対して緊張する」,「制服によってどのような会社かイメージしやすい」,「制服を着用していると性格が想像しにくい」,「服装によって相手の印象が変わることはない」,「年代や地位によってふさわしい服装は変化すると思う」の10項目とした。なお、質問項目の順番はランダムにした。

3) 基本属性

基本属性として性別、年代、職業を質問した。年代は「～19歳、20～24歳、25～29歳、30～34歳、35～39歳、40～44歳、45～49歳、50～54歳、55～59歳、60～64歳、65～69歳、70歳～」,職業は「公務員、経営者・役員、会社員(事務系)、会社員(技術系)、会社員(その他)、自由業、学生、パート・アルバイト、その他」より1つ選択することによって回答を得た。

(3) 解析方法

統計分析にはIBM SPSS Statistics23およびHAD17.10を使用した。先行研究より、服装規範には男女差および年代差、職業による違いがあることが報告されているため、「服装が印象に残る程度」,「就労者の服装に対する他者の意識」のいずれも単純集計した後、男女差および年代差、職業ごとに平均の差の検定(t検定および分散分析)を行った。「就労者の服装に対する他者の意識」については因子分析(Promax回転・最尤法)を行った。

3. 結果と考察

(1) 基本属性

回答者数は249名であり、性別の内訳は男性87名(34.9%)、女性162名(65.1%)であった。性別と年齢の内訳を表1-1、性別と職業の内訳を表1-2に示す。年齢は「20代以下」,「30代」,「40代」,「50代以上」の区分でまとめた。

(2) 服装が印象に残る程度

服装が印象に残る程度の質問項目に対して、4段階尺度の「とても印象に残る」に4点、「やや印象に残る」に3点、「ほとんど印象に残らない」に2点、「全く印象に残らない」に1点を与えて数値化し、設問ごとに平均点を算出した。各項目の平均点、性別ごとの平均点、年齢群ごとの平均点を表2-1、職業別の平均点を表2-2に示す。

平均点は高い順に「服装(着こなしを含む)」(3.47)、「髪型」(3.40)、「化粧」(3.00)、「持ち物(バッグ等)」(2.66)、「アクセサリ、時計」(2.63)、「靴」(2.44)であった。一元配置の分散分析を行った結果、有意となった($F(5,1488)=80.17, p<0.001$)。多重比較(LSD法)の結果を表2-3に示す。被服について印象の残る程度は、服装=髪型>化粧>アクセサリ・時計=持ち物(バッグ等)>靴の順であることが分かった。したがって、直接人と会う際に服装・髪型は印象に残りやすく、印象を形成する上で重要であるといえる。

次に、服装が印象に残る程度について、性別、年齢群、職業別に平均値の差の検定を行った。結果を表2-1および表2-2に示す。男女間

表1-1 回答者の年齢と性別

	20代以下	30代	40代	50代以上	合計
男性	24 (9.6%)	40 (16.0%)	16 (6.4%)	7 (2.8%)	87
女性	44 (17.7%)	64 (25.7%)	28 (11.2%)	26 (10.4%)	162
合計	68	104	44	33	249

表1-2 回答者の性別と職業

	公務員	経営者・ 役員	会社員 (事務系)	会社員 (技術系)	会社員 (その他)	自由業	学生	パート・ アルバイト	その他	合計
男性	10	3	14	21	12	3	15	3	6	87
女性	15	0	29	10	18	8	30	31	21	162
合計	25	3	43	31	30	11	45	34	27	249

表2-1 「服装が印象に残る程度」の全体・男女別・年齢群別の平均点

		全体	性別			年齢群					多重比較 (LSD法)
			男性	女性	<i>t</i>	20代 以下	30代	40代	50代 以上	<i>F</i>	
服装 (着こなしを含む)	<i>M</i>	3.47	3.26	3.58	-3.38**	3.65	3.46	3.25	3.42	3.35*	20代以下> 40代
	<i>SD</i>	0.67	0.81	0.54	(152.62)	0.62	0.67	0.75	0.56	(3,245)	
化粧	<i>M</i>	3.00	2.78	3.11	-1.31	2.94	2.99	2.95	2.85	0.63	—
	<i>SD</i>	0.75	0.81	0.69	(247)	0.09	0.07	0.11	0.16	(3,245)	
髪型	<i>M</i>	3.40	3.33	3.44	-3.25**	3.59	3.38	3.30	3.24	3.58*	20代以下>30代= 40代=50代以上
	<i>SD</i>	0.60	0.64	0.58	(128.14)	0.63	0.56	0.63	0.56	(3,245)	
アクセサリ、 時計	<i>M</i>	2.63	2.51	2.70	-1.85	2.72	2.49	2.66	2.62	1.97	—
	<i>SD</i>	0.81	0.82	0.80	(247)	0.10	0.08	0.13	0.17	(3,245)	
靴	<i>M</i>	2.44	2.38	2.48	-0.81	2.32	2.52	2.49	2.21	1.33	—
	<i>SD</i>	0.89	0.92	0.87	(247)	0.11	0.09	0.14	0.19	(3,245)	
持ち物 (バッグ等)	<i>M</i>	2.66	2.51	2.74	-2.20*	2.84	2.51	2.67	2.50	2.24	—
	<i>SD</i>	0.78	0.83	0.74	(159.72)	0.10	0.08	0.12	0.16	(3,245)	

有意水準：* $p<0.05$,** $p<0.01$

表2-2 「服装が印象に残る程度」の職業別の平均点

	職業										F	多重比較 (LSD法)
	公務員	経営者・役員	会社員 (事務系)	会社員 (技術系)	会社員 (その他)	自由業	学生	パート・アルバイト	その他	27		
<i>n</i>	25	3	43	31	30	11	45	34	27			
<i>M</i>	3.32	3.33	3.51	3.03	3.63	3.36	3.67	3.62	3.41	3.05**		
<i>SD</i>	0.69	0.58	0.63	1.02	0.49	0.50	0.52	0.49	0.64	(8,240)		学生=公務員 会社員(事務系)=会社員(その他)=学生=パート・アルバイト=その他 会社員(技術系)
<i>M</i>	3.00	2.33	3.09	2.84	2.93	3.09	3.09	2.97	3.00	0.69		
<i>SD</i>	0.76	0.58	0.75	0.90	0.69	0.70	0.82	0.67	0.62	(8,240)		
<i>M</i>	3.28	3.33	3.23	3.32	3.40	3.27	3.76	3.32	3.44	2.89**		
<i>SD</i>	0.61	0.58	0.65	0.70	0.62	0.65	0.43	0.47	0.58	(8,240)		
<i>M</i>	2.64	3.33	2.53	2.61	2.43	3.00	2.78	2.56	2.67	1.10		学生>公務員=会社員(事務系)=会社員(技術系)=会社員(その他)=自由業=パート・アルバイト=その他
<i>SD</i>	0.76	1.15	0.80	0.88	0.86	0.63	0.77	0.66	0.96	(8,240)		
<i>M</i>	2.40	2.67	2.49	2.52	2.57	2.55	2.18	2.41	2.59	0.76		
<i>SD</i>	0.87	0.58	0.94	1.06	0.86	0.52	0.86	0.82	0.93	(8,240)		
<i>M</i>	2.44	3.00	2.67	2.61	2.53	2.73	2.84	2.65	2.67	0.75		
<i>SD</i>	0.58	1.00	0.78	0.95	0.86	0.65	0.74	0.77	0.78	(8,240)		

有意水準：***p*<0.01

表2-3 「服装が印象に残る程度」の質問項目間の多重比較の結果

	化粧	髪型	アクセサリー、時計	靴	持ち物 (バッグ等)
服装 (着こなしを含む)	*	n.s.	*	*	*
化粧		*	*	*	*
髪型			*	*	*
アクセサリー、時計				*	n.s.
靴					*

でt検定を行った結果、「服装（着こなしを含む）」($t(152.62) = -3.38, p < 0.01$), 「髪型」($t(128.14) = -3.25, p < 0.01$), 「持ち物（バッグ等）」($t(259.72) = -2.20, p < 0.05$)で有意差が認められ、いずれの項目も女性の方が平均値が高かった。女性のほうが相手の外見について印象に残るといえる。年齢群間で一元配置の分散分析を行った結果、「服装（着こなしを含む）」($F(3,245) = 3.35, p < 0.05$), 「髪型」($F(3,245) = 3.58, p < 0.05$)で有意であった。多重比較(LSD法)の結果、「服装（着こなしを含む）」は20代以下と40代で有意差が認められ、20代以下の方が平均値が高かった。「髪型」は20代以下と30代、40代、50代以上で有意差が認められ、20代以下は他の年齢群に比べて平均点が高かった。年代間で差異が認められる場合、若年層のほうが相手の外見について印象に残ることが示唆された。職業間で一元配置の分散分析を行った結果、「服装（着こなしを含む）」($F(8,240) = 3.05, p < 0.01$), 「髪型」($F(8,240) = 2.89, p < 0.01$)で有意であった。多重比較(LSD法)の結果、「服装（着こなしを含む）」は会社員(事務系)、会社員(その他)、学生、パート・アルバイト、その他と会社員(技術系)に有意差が認められ、会社員(技術系)の平均値が低かった。会社員(技術系)は他の職種に比べて相手の服装の印象が残らないといえる。また、公務員と学生の間にも有意差が認められ、学生の方が平均値が高かった。「髪型」は学生と公務員、会社員(事務系)、会社員(技術系)、会社員(その他)、自由業、パート・アルバイト、その他に有意差が認められ、学生の平均値が高かった。相手の髪型が印象に残るのは学生の特徴といえる。

以上より、外見の中でも相手の印象に残りやすいのは、持ち物や装飾品よりも服装や髪型であることが明らかになり、女性や若年層ではその傾向が強いことが示唆された。安永¹⁴⁾はファッションへの関心について、男性よりも女性、30代以降よりも20代の方が関心が高いことを報告しており、ファッションへの関心の高さが印象に残る程度に影響を与えたと推察される。

(3) 就労者の服装に対する他者の意識

1) 各項目の平均値

就労者の服装に対する他者の意識の質問項目に対して、5段階尺度の「あてはまる」に5点、「ややあてはまる」に4点、「どちらでもない」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「あてはまらない」に1点を与えて数値化し、設問ごとに平均点を算出した。各項目の全体の平均点を表3-1に示す。

全体の平均点が4.0以上と高かった項目は、「寒い時期における室内での防寒は、ひざ掛けをしたりショールを羽織ったりして調整をしてもよいと思う」(4.75), 「暑い時期には、涼しく過ごす(ネクタイをしない、シャツのボタンをあける、腕まくりをする)ことを優先してよいと思う」(4.61), 「髪も重要な身だしなみだと思う」(4.53), 「オフィス勤務の男性の服装としてスーツ以外のジャケットでもよいと思う」(4.49), 「鞆はトートバッグ型でもリュック型でも使いやすいものでよいと思う」(4.46), 「オフィス勤務の女性の服装としてカジュアルな服装(ニット、カットソー、カーディガン等)でもよいと思う」(4.41), 「年代や地位によってふさわしい服装は変化すると思う」(4.22), 「オフィス勤務の男性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思う」(4.10), 「靴は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思う」(4.00)の9項目である。被服の機能性に関する項目やカジュアルな装いに対して肯定的であるといえる。1993年の矢尻ら¹²⁾の調査では、着用者はスーツ・ネクタイスタイルを仕事着として受け入れていたのに対して、本研究では被服の機能性やカジュアルな装いに対して他者は肯定的に捉えている。2005年に環境省が掲げた「COOL BIZ」等によって軽装での就労が浸透したことが影響していると推察される。一方、平均点が2.0以下と低かった項目は、「女性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う」(1.96), 「女性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない」(1.62)の2項目であった。女性の履く靴やアクセサリの着用に対して他者の規範意識は高くなく、着用者の被服行動が尊重されているといえる。

表3-1 就労場面の服装に対する他者の意識の平均点

質問項目	全体 (n=249)	
	M	SD
オフィス勤務の男性の服装はスーツがよいと思う	2.54	1.15
オフィス勤務の男性の服装としてスーツ以外のジャケットでもよいと思う	4.49	0.75
商談等の接客時の男性の服装はスーツがよいと思う	3.74	1.09
オフィス勤務の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う	2.24	0.99
商談等の接客時の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う	3.33	1.26
男性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う	2.39	1.13
女性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う	1.96	0.99
ジャケットの着用によって、信頼感が増すと思う	3.57	1.08
男性のネクタイの着用によって、信頼感が増すと思う	3.03	1.21
オフィス勤務の男性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思う	4.10	0.95
オフィス勤務の女性の服装としてカジュアルな服装（ニット、カットソー、カーディガン等）でもよいと思う	4.41	0.83
流行を取り入れた服装をすることは重要だと思う	2.72	1.09
爪の手入れ（マニキュア等）も重要な身だしなみだと思う	3.49	1.14
男性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない	2.59	1.28
女性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない	1.62	0.79
髪も重要な身だしなみだと思う	4.53	0.71
暑い時期には、涼しく過ごす（ネクタイをしない、シャツのボタンをあける、腕まくりをする）ことを優先してよいと思う	4.61	0.65
暑い時期には、靴下やストッキングは履かず、サンダル類で勤務してもよいと思う	2.97	1.40
服装は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思う	3.83	0.96
靴は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思う	4.00	1.02
寒い時期における室内での防寒は、ひざ掛けをしたりショールを羽織ったりして調整をしてもよいと思う	4.75	0.64
靴はトートバッグ型でもリュック型でも使いやすいものでよいと思う	4.46	0.87
職種による服装のイメージはメディア（テレビや雑誌等）の影響を受けている	3.82	0.98
職種による服装のイメージは自分の社会経験によって形成されている	3.76	0.98
服装によって職種をイメージできる	3.66	0.95
服装の着こなしによって仕事ぶりを想像する	3.49	1.12
服装の着こなしによって性格を想像する	3.88	0.97
ラグジュアリーブランド（ハイブランド）であることが分かる服を着ている人に対して緊張する	2.80	1.30
制服によってどのような会社かイメージしやすい	3.56	1.09
制服を着用していると性格が想像しにくい	3.03	1.12
服装によって相手の印象が変わることはない	2.16	1.02
年代や地位によってふさわしい服装は変化するという	4.22	0.90

表3-2 男性の服装と女性の服装に対する意識の違い

対応する項目	<i>M</i>	<i>SD</i> (再掲)	<i>t</i> (<i>df</i>)
オフィス勤務の男性の服装はスーツがよいと思う	2.54	1.15	4.97***
オフィス勤務の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う	2.24	0.99	(248)
オフィス勤務の男性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思う	4.10	0.95	-5.49***
オフィス勤務の女性の服装としてカジュアルな服装 (ニット, カットソー, カーディガン等) でもよいと思う	4.41	0.83	(248)
商談等の接客時の男性の服装はスーツがよいと思う	3.74	1.09	6.71***
商談等の接客時の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う	3.33	1.26	(248)
男性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う	2.39	1.13	7.77***
女性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う	1.96	0.99	(248)
男性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない	2.59	1.28	12.31***
女性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない	1.62	0.79	(248)

有意水準：*** $p < 0.001$

2) 男性の服装と女性の服装に対する意識の違い

質問項目の中には、同一の服装に対して着用者を男性と女性に項目を分けて質問した項目が含まれている。対応する項目（「オフィス勤務の男性の服装はスーツがよいと思う」と「オフィス勤務の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う」, 「オフィス勤務の男性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思う」と「オフィス勤務の女性の服装としてカジュアルな服装（ニット, カットソー, カーディガン等）でもよいと思う」, 「商談等の接客時の男性の服装はスーツがよいと思う」と「商談等の接客時の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う」, 「男性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う」と「女性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う」, 「男性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない」と「女性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない」）についてt検定を行った結果を表3-2に示す。いずれの項目も有意差が認められた。女性の服装に比べると男性の服装はフォーマル性の高い服装が就労場面の服装として適切と捉えられていることが分かる。男性の服装としてスーツスタイルが定着してきたことが影響していると推察される。就労者の服装に対する他者の意識は、男性と女性の服装では違いがあることが示された。

3) 因子構造の検討

「就労者の服装に対する他者の意識」32項目について、因子分析を行った（Promax回転・最尤法）。因子数はスクリープロット、固有値の変化、解釈可能性から4因子として分析した。各項目の因子負荷量が1つの因子に|0.35|以上であることを基準に分析を繰り返した結果、4因子25項目が抽出された。各下位尺度の信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出したところ、.77-.84と概ね高い内的整合性が示された。因子分析の結果を表3-3に示す。

因子名は、第1因子はスーツやジャケットの着用や通勤時の靴は革靴がよいことが含まれることから「フォーマルな服装」、第2因子は商談時の服装が含まれることから「フォーマルな場面のスーツ着用」、第3因子は服装にイメージや身だしなみが含まれることから「服装による印象形成」、第4因子は動きやすさや気候に合わせた着こなしが含まれることから「被服の機能性」と命名した。

下位尺度得点を算出したところ、各因子の平均点は「フォーマルな服装」2.15, 「フォーマルな場面のスーツ着用」3.54, 「服装による印象」3.71, 「被服の機能性」4.06であった。因子間について一元配置の分散分析を行った結果、有意となった（ $F(3,992) = 278.91, p < 0.001$ ）。多重比較（LSD法）の結果、いずれの因子間にも有意差が認められた。就労場面の服装に対する他

表3-3 就労場面の服装に対する他者の意識の因子分析結果 (promax回転・最尤法)

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
F1：フォーマルな服装（5項目、$\alpha = .84$）					
女性が結婚指輪以外のアクセサリをすることは望ましくない	.77	-.26	.05	.10	.39
女性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う	.76	-.01	.12	-.02	.63
オフィス勤務の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う	.69	.16	.03	.02	.62
男性の通勤および勤務時の靴は革靴がよいと思う	.56	.08	.13	-.26	.63
オフィス勤務の男性の服装はスーツがよいと思う	.51	.22	.05	-.12	.53
F2：フォーマルな場面のスーツ着用（2項目、$\alpha = .79$）					
商談等の接客時の男性の服装はスーツがよいと思う	-.12	.94	-.03	-.01	.75
商談等の接客時の女性の服装はスーツやジャケットがよいと思う	.01	.77	.04	.08	.60
F3：服装による印象形成（11項目、$\alpha = .77$）					
服装の着こなしによって性格を想像する	-.06	-.03	.75	-.08	.53
服装の着こなしによって仕事ぶりを想像する	.14	-.04	.63	-.06	.43
頭髮も重要な身だしなみだと思ふ	-.11	.07	.61	.04	.41
制服によってどのような会社かイメージしやすい	.17	-.04	.54	.12	.33
服装によって職種をイメージできる	.20	-.09	.50	.14	.27
爪の手入れも重要な身だしなみだと思ふ	-.03	-.02	.40	-.03	.15
服装によって相手の印象が変わることはない	.25	.05	-.39	.29	.19
職種による服装のイメージは自分の社会経験によって形成されている	.08	.03	.38	.14	.18
ジャケットの着用によって信頼感が増すと思ふ	.05	.30	.37	-.01	.37
年代や地位によってふさわしい服装は変化すると思ふ	-.04	.14	.37	.02	.20
ラグジュアリーブランドであることが分かる服を着ている人に対して緊張する	.18	-.06	.37	.00	.16
F4：被服の機能性（7項目、$\alpha = .76$）					
服装は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思ふ	.19	.05	-.19	.86	.62
靴は見た目よりも動きやすさを重視してよいと思ふ	.04	.01	.00	.73	.51
暑い時期には涼しく過ごすことを優先してよいと思ふ	-.07	.07	.15	.48	.28
暑い時期には靴下やストッキングは履かずサンダル類で勤務してもよいと思ふ	.00	-.05	-.01	.44	.21
オフィス勤務の女性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思ふ	-.34	.01	.27	.40	.45
オフィス勤務の男性の服装としてカジュアルな服装でもよいと思ふ	-.25	-.15	.12	.38	.39
鞆はトートバッグ型でもリュック型でも使いやすいものでよいと思ふ	-.26	.12	.11	.36	.25
因子間相関					
	F2	.558			
	F3	.157	.478		
	F4	-.466	-.323	.023	

者の意識は「被服の機能性」>「服装による印象形成」>「フォーマルな場面のスーツ着用」>「フォーマルな服装」の順に肯定的であるといえる。山口ら¹³⁾によると、衣服の機能は「保健衛生上の機能」と「装飾審美的な機能」に大別されることがあるが、「被服の機能性」は保健衛生上の機能、「服装による印象形成」、「フォーマルな場面のスーツ着用」、「フォーマルな服装」は装飾審美的な機能といえる。他者の服装

に対して、装飾審美的な機能よりも保健衛生上の機能に対して肯定的に捉えていることが分かる。

4) 属性による因子得点の差の検討

各因子において、性別、年齢群、職業における水準間の平均値の差の違いを検討した。各因子の平均値および性別、年齢群、職業別の尺度得点平均値と平均の差の検定結果を表3-4、表3-5に示す。

表3-4 因子ごとの平均点および男女別・年齢群別の平均の差の検定結果

因子名	全体		性別					年齢群					多重比較 (LSD法)
	n	M	男性	女性	t	F	df	20代以下	30代	40代	50代以上	50代以上 > 20代以下 = 30代 = 40代	
			87	162	(df)			68	104	44	33		
フォーマルな服装	249	2.15	2.11	2.17	-0.61	4.67**	2.14	2.00	2.19	2.58	0.85	(3,245)	
SD	0.80	0.77	0.81	(247)	0.83	0.72	0.77	0.85	(3,245)				
フォーマルな場面の	249	3.54	3.11	3.77	-4.81***	4.00**	3.78	3.34	3.38	3.88	0.92	(3,245)	
SD	1.07	1.07	1.07	(247)	1.02	1.08	1.13	1.08	1.13	0.92	(3,245)		
服装による印象形成	249	3.71	3.44	3.85	-5.34***	2.93*	3.88	3.63	3.63	3.72	0.51	(3,245)	
SD	0.57	0.63	0.63	(141,23)	0.56	0.52	0.72	0.51	0.72	0.51	(3,245)		
被服の機能性	249	4.06	3.95	4.11	-2.00*	0.66	4.08	4.10	3.97	3.97	0.57	(3,245)	
SD	0.63	0.69	0.69	(247)	0.70	0.61	0.58	0.57	0.58	0.57	(3,245)		

有意水準：* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

表3-5 因子ごとの平均点および男女別・年齢群別の平均の差の検定結果

因子名	職業											多重比較 (LSD法)		
	n	M	SD	経営者・役員	会社員 (事務系)	会社員 (技術系)	会社員 (その他)	自由業	学生	パート・アルバイト	その他		F	df
				3	43	31	30	11	45	34	27			
フォーマルな服装	25	2.11	0.71	2.80	2.20	2.02	2.15	1.69	2.17	2.34	2.08	1.12	8,240	
SD	0.71	0.66	0.73	1.02	0.65	0.87	0.70	0.81	0.81	0.70	0.81	(8,240)		
フォーマルな場面のスーツ着用	25	3.56	1.18	4.17	3.51	3.06	3.52	2.82	3.83	3.82	3.48	2.35*	8,240	
SD	1.18	0.76	0.85	1.09	1.31	1.00	1.19	1.00	1.00	0.97	1.08	(8,240)		
服装による印象形成	25	3.85	0.54	3.82	3.70	3.41	3.63	3.52	3.91	3.85	3.57	2.83**	8,240	
SD	0.54	0.92	0.48	0.76	0.62	0.45	0.56	0.62	0.45	0.53	0.54	(8,240)		
被服の機能性	25	3.99	0.64	4.05	3.94	3.97	4.06	4.23	4.17	4.15	4.01	0.71	8,240	
SD	0.64	0.30	0.54	0.74	0.67	0.74	0.74	0.67	0.61	0.53	0.61	(8,240)		

有意水準：* $p<0.05$, ** $p<0.01$

学生 = パート・アルバイト > 会社員 (技術系) = 自由業
 経営者・役員 > 自由業
 公務員 = 会社員 (事務系) = 学生 = パート・アルバイト > 会社員 (技術系)
 学生 > 会社員 (その他) = 自由業 = 会社員 (技術系) = その他

男女間でt検定を行った結果、「フォーマルな場面のスーツ着用」($t(247) = -4.81, p < 0.001$), 「服装による印象形成」($t(141.23) = -5.34, p < 0.001$), 「被服の機能性」($t(247) = -2.00, p < 0.05$) で有意差が認められ、いずれも女性の方が平均点が高かった。他者の服装に対する意識は女性の方が高いといえる。先述した通り、安永¹⁴⁾によると男性よりも女性の方がファッションへの関心が高く、ファッションへの関心の高さが他者の服装に対する意識に影響を与えたと推察される。

年齢群間で一元配置の分散分析を行った結果、「フォーマルな服装」($F(3,245) = 4.67, p < 0.01$), 「フォーマルな場面のスーツ着用」($F(3,245) = 4.00, p < 0.01$), 「服装による印象形成」($F(3,245) = 2.93, p < 0.05$) で有意であった。多重比較(LSD法)の結果、「フォーマルな服装」は50代以上と20代以下、30代、40代間に有意差が認められ、50代以上の平均点が高かった。50代以上は他の年齢群と比較すると就労場面のフォーマルな服装について肯定的であるといえる。「フォーマルな場面のスーツ着用」は20代以下、50代以上と30代、40代間に有意差が認められた。20代以下、50代以上は30代、40代に比べて平均点が高く、フォーマルな場面での服装としてスーツの着用がよいと考えていることが分かる。「服装による印象形成」は20代以下と30代、40代との間で有意差が認められた。20代以下は30代、40代と比較して平均点が高く、服装によって印象が変化すると推察される。以上より、30代・40代は他の年齢群に比べてフォーマルな服装や服装による印象形成への意識が低いといえる。30代・40代はCOOL BIZ等により就労時の服装が軽装化した世代であり、回答者の被服行動が他者の服装への意識にも影響を与えたと考えられる。

職業間で一元配置の分散分析を行った結果、「フォーマルな場面のスーツ着用」($F(8,240) = 2.35, p < 0.05$), 「服装による印象形成」($F(8,240) = 2.83, p < 0.01$) で有意であった。「フォーマルな場面のスーツ着用」は経営者・役員と自由業の間、学生、パート・アルバイトと会社員(技術系)、自由業の間で有意差が認められた。経営者・役員は自由業より平均点が高く、

学生、パート・アルバイトは会社員(技術系)、自由業よりも平均点が高かった。「服装による印象形成」は公務員、会社員(事務系)、学生、パート・アルバイトと会社員(技術系)の間、学生と会社員(その他)、自由業、会社員(技術系)、その他の間で有意差が認められた。会社員(技術系)は他の業種より平均点が低く、学生は他の業種よりも平均点が高かった。以上より、学生は社会人よりもフォーマルな場面におけるスーツの着用に必要なと感じており、就労前は他者への意識として服装を含む外見の要素が大きいものの、就労の経験によって、服装以外の要素が印象形成に影響を与えるようになると推察される。ただし、今回の調査では職種ごとの人数に偏りが大きいいため、職種との詳細な関連の検討は今後の課題である。

以上の結果より、就労場面の服装に対する他者の意識は、性別、年代、職業によって異なるといえる。「フォーマルな服装」の全体の平均点は他の因子よりも低く、フォーマルな服装でなくてもよいと考えているものの、年代差は見られ、50代以上は他の年代よりもフォーマルな服装に肯定的であった。「フォーマルな場面のスーツ着用」と「服装による印象形成」はいずれも女性の方が平均点が高く、30代、40代は他の年代よりも平均点が低かった。また、職種による意識の違いも示された。印象管理・印象形成に関わる服装は、立場によって他者への評価が異なると推察される。「被服の機能性」は女性の方が平均点が高かったものの年代差や職種による違いはみられなかった。4因子の中で最も平均点が高かったことから、機能性を重視した着こなしは年代や職種に関わらず肯定的に捉えられているといえる。

4. まとめ

就労場面の服装に対する他者の意識を明らかにするために、インターネット・アンケート調査を2020年12月～2021年7月に実施した。18歳以上の男女を対象に調査を行い、249名(男性87名、女性162名)から回答を得た。主な結果を以下に示す。

(1) 直接、人と会った時に外見に関して印象に残る程度は「服装(着こなしを含む)」＝「髪

型」>「化粧」>「アクセサリ・時計」=「持ち物（バッグ等）」>「靴」の順であることから、服装は印象に残りやすく、印象を形成する上で重要であるといえる。

- (2) 就労者の服装に対する他者の意識は、「寒い時期における室内での防寒は、ひざ掛けをしたりショールを羽織ったりして調整をしてもよいと思う」、「暑い時期には、涼しく過ごす（ネクタイをしない、シャツのボタンをあける、腕まくりをする）ことを優先してよいと思う」等の被服の機能性やカジュアルな装いに対して肯定的であった。また、女性の履く靴やアクセサリの着用に対しては、着用者の被服行動が尊重されているといえる。
- (3) 同一の服装について着用者を男性と女性に分けて質問した項目の比較より、男性の服装は女性よりもフォーマル性の高い服装が就労場面の服装として適切と捉えられていた。
- (4) 就労場面の服装に対する他者の意識の構造は因子分析の結果、4因子が抽出された。第1因子は「フォーマルな服装」、第2因子は「フォーマルな場面のスーツ着用」、第3因子は「服装による印象形成」、第4因子は「被服の機能性」と命名した。下位尺度得点の平均値は高い順に「被服の機能性」>「服装による印象形成」>「フォーマルな場面のスーツ着用」>「フォーマルな服装」であった。
- (5) 就労場面の服装に対する他者の意識の因子と属性の関連性を検証した結果、「フォーマルな服装」は年代差が見られ、50代以上は他の年代よりもフォーマルな服装に肯定的であった。「フォーマルな場面のスーツ着用」と「服装による印象形成」はいずれも女性の方が平均点が高く、30代、40代は他の年代よりも平均点が低かった。また、職種による意識の違いも示された。「被服の機能性」は女性の方が平均点が高かったものの年代差や職種による違いはみられなかった。

以上の結果より、就労者の服装に対する他者の意識は「フォーマルな服装」、「フォーマルな場面のスーツ着用」、「服装による印象形成」、「被服の機能性」の4因子構造になっていることが明らかになった。今後は、生活する上での

価値観等の個人的特徴との関わりについて検討し、就労者の服装に対する他者の意識の構造を明らかにしていきたい。

付記

本研究は（一社）日本家政学会第73回大会で発表したものの一部を再分析・加筆修正したものである。

【引用文献】

- 1) 阿部久美子, 高木修, 神山進, 牛田聡子, 辻幸恵 (2000). 「着装規範に関する研究 (第3報): 生活場面と着装基準の評定に基づく着装規範意識の構造化」『繊維製品消費科学』41 (11), 861-867
- 2) 福岡欣治, 高木修, 神山進, 牛田聡子, 阿部久美子 (1998). 「着装規範に関する研究 (第1報): 生活場面と着装基準の関連性」『繊維製品消費科学』39 (11), 702-708
- 3) 内藤章江, 小林茂雄 (2001). 「着装規範に対する着装行動要因の影響」『繊維製品消費科学』42 (11), 743-751
- 4) 中川早苗 (1984). 「衣生活システムの理論的・実証的研究 (第2報): サラリーマンの服装に対する規範意識の構造」『日本家政学会誌』35 (4), 235-260
- 5) 中川早苗, 武井敦子 (1984). 「サラリーマンの服装に対する意識と行動: 高蔵寺ニュータウンにおける実証研究」『繊維製品消費科学』25 (4), 174-182
- 6) 中川由理, 高木修 (2011). 「印象管理スキルとしての被服選択行動の過程: 職場における着装規範意識に注目して」『繊維製品消費科学』52 (2), 129-134
- 7) 大石さおり (2006). 「仕事時の服装による印象管理傾向とキャリア志向の関連: 日本の有職女性の場合」『ファッションビジネス学会論文誌』11, 11-18
- 8) 辻幸恵, 高木修, 神山進, 牛田聡子, 阿部久美子 (2001). 「着装規範に関する研究 (第7報): 着装規範同調・逸脱がもたらす感情と規範意識高低による差異」『繊維製品消費科学』42 (11), 728-734
- 9) 牛田聡子, 高木修, 神山進, 阿部久美子, 福岡欣治 (1998). 「着装規範に関する研究 (第2報): 場面と基準の関連性を規定する個人差要因」『織

- 維製品消費科学』39(11), 709-715
- 10) 牛田聡子, 高木修, 神山進, 阿部久美子, 辻幸恵 (2000). 「着装規範に関する研究 (第4報): 着装規範意識を規定する個人差要因 (自意識・形式主義・社会的スキル)」『繊維製品消費科学』41(11), 868-875
- 11) 牛田聡子, 高木修, 神山進, 阿部久美子, 辻幸恵 (2001). 「着装規範に関する研究 (第8報): 着装規範同調・逸脱がもたらす着装感情を規定する個人差要因 (自意識・自尊心・独自性欲求)」『繊維製品消費科学』42(11), 735-742
- 12) 矢尻世津子, 高岡朋子, 盛田真千子, 小林茂雄 (1995). 「男性の通勤スタイルと仕事に対する態度との関連」『繊維機械学会誌』48(4), 95-104
- 13) 山口庸子, 生野晴美 (2019). 『衣生活論: 持続可能な消費と生産』アイ・ケイ・コーポレーション
- 14) 安永明智, 野口京子 (2012). 「ファッションへの関心と着装行動に関する基礎的調査研究: 性別、年齢、主観的経済状況、性格による差の検討」『ファッションビジネス学会論文誌』17, 129-137